甲奴郷土史だより

第29号
2023年2月
甲奴郷土史研究会発行

『旧正月』をなぜ日本では祝わなくなったのか

鶴本節子

令和五年。新しい年となりました。会員の皆さまは健康で新年をお迎えになられたことと思います。

昨年はロシアとウクライナの戦争、なかなか終息しないコロナウィルス、北朝鮮のミサイル発射など、いろいろとあった年でした。

さて、『旧正月』という言葉を若い年代のなかには知らない人が多いのではないか。かく言う私もテレビなどのニュースで、中国の人々が『旧正月』を爆竹で祝ったなどと聞くくらいである。そもそもなぜ日本は『旧正月』を祝わなくなってしまったのだろうか。

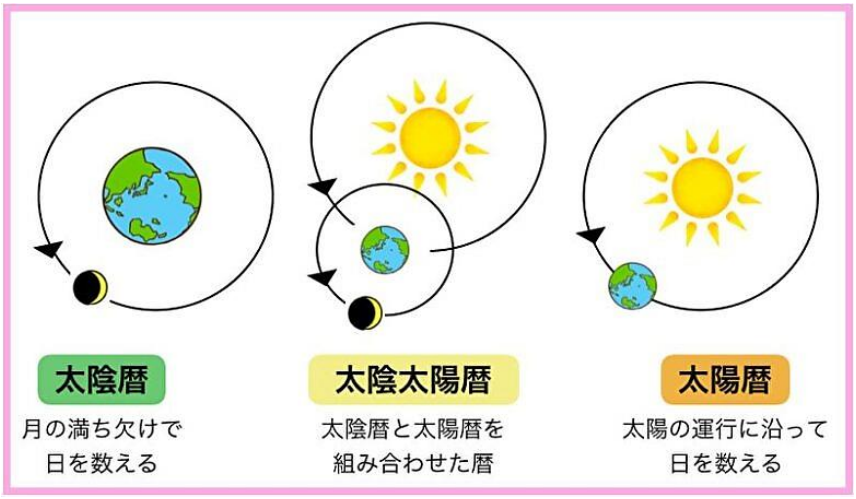
昭和六〇(一九八五)年に発行された【郷土の年中行事と方言】の『旧正月』によると、

明治五年に現在の太陽暦が採用されるまでは、年中行事はすべて旧暦によって行われ、正月祝いもこの日が中心であった。新暦になっても旧正月の行事は新正月と同じように祝われたが、戦後は次第に行われなくなったようである。

とある。

新暦と旧暦の違いは、地球が太陽の周りをまわる周期をもとにして作られた、現在私たちが使っている新暦(太陽暦)に対して、旧暦は月の満ち欠けを基準としている。新月から次の新月までは平均して29・5日間で、一年間が354日あるので3年で約1ヵ月のずれが生じる。そのため旧暦には閏月というものがあり、3年に1回ひと月多い年があるのが最大の違い。

旧正月は、その年によって日にちが異なる。二十四節季の雨水(新暦二月一九日頃)の直前の朔日(新月)が旧暦の元日となり、新暦では年によって一月二二日から二月一九日までの間を移動することになる。朔日を元日として始まる新年を大正月といい、一五日の望の



日（満月）を小正月という。

『旧正月』を祝わなくなった理由は、諸説あるようである。例えば、

日本でも元々明治維新の前までは旧暦を使い、『旧正月』を祝ってきた。ところが明治五（一八七二）年一一月九日に政府より旧暦から新暦に切り替えると布告されると、『旧正月』はなくなってしまった。

それは、新暦に切り替える通達を行ったのは当時の天皇陛下だった。当時の天皇信仰は現在の比ではないため、天皇が言うのだから新暦の方が正しいのだと認識されてしまったようだ。

とか、

旧暦から新暦に変わることが決まってから一ヶ月未満で施行されている。改暦を急いだ理由はいくつかあるが、その一つは、明治に入って完了が月給制に変わり、翌年は閏月が入って一年が一三ヶ月になる年なので、一三回も給与を支払うのが厳しいといった財政理由だったとか。

明治維新後の日本は、海外との交流が活発化し、西洋に追いつこうと勢いづき、すでに多くの西洋の国で採用されていた新暦に改暦し、世界基準に合わせたなど・・・。

全国的にはなじみが薄くなった『旧正月』だが、沖縄や南西諸島などでは『旧正月』を祝う文化が残っている地域もある。

沖縄では『旧正月』の朝に組み上げた「若水」や、鏡餅に似た「ウチャヌク」を神様（ヒヌカン・火の神）にお供えするそうである。

また、正月料理に豚肉を使い、豚の骨付き肉を煮込んで作った「ソーキ汁」や、昆布と豚肉を炒め煮した「クーブイリチー」、豚の三枚肉w泡盛などで煮込んだ角煮「ラフテー」などは沖縄の『旧正月』の定番料理だそうだ。

👈の写真　上から「ソーキ汁」、「クーブイリチー」、「ラフテー」

なお、横浜や神戸の中華街などでは、毎年『旧正月』を祝うイベントが行われている。

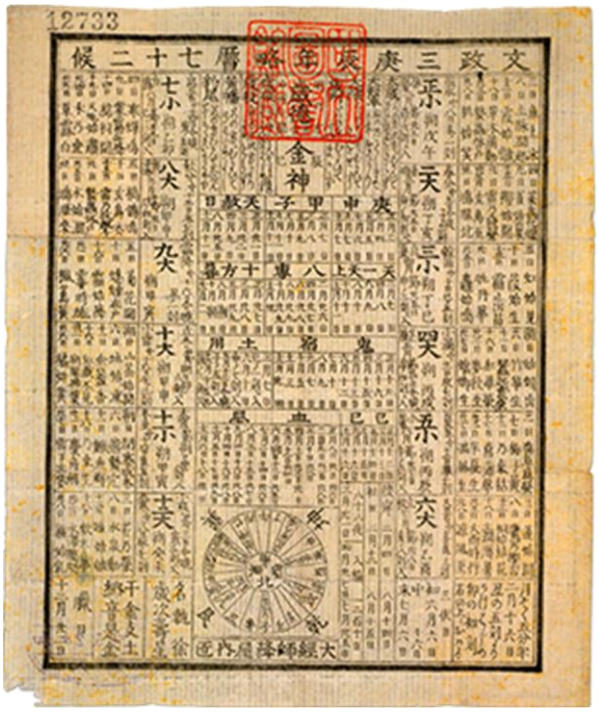
旧暦についておもしろいエピソードがある。

旧歴明治五年一二月三日が、新暦明治六年一月一日と改定された。旧暦五（一八七二）年の一二月三日の約一ヶ月前。ある日突然お上から『明治五年一二月三日が、明治六年一月一日になる』と言われた（太政官布告）。庶民は驚いたに違いない。

本来なら、七夕も旧暦で八月七日近辺になる。日本の七月七日だと「梅雨」で、天の川が見られない。桃の節句は、新暦の三月三日では桃の花が時期外れ。しかしこれらの行事の多くは日を変えられない。昔から中国では、七月七日のように、ひと桁の奇数が重なる日はおめでたいとされた。

ただ、十五夜は旧暦で通している。それは、十五夜が満月でないと意味がないからだ。

それから、お盆は七月一五日を中心とする先祖の霊をまつる行事だが、多くは八月に旧盆として行っている。八月のお盆を正しくは月遅れのお盆という。



◆大小暦（江戸時代）　出典：国立国会図書館

【参考資料】

・アカシアの樹　・タウンニュース　・農林水産省　・クラシル

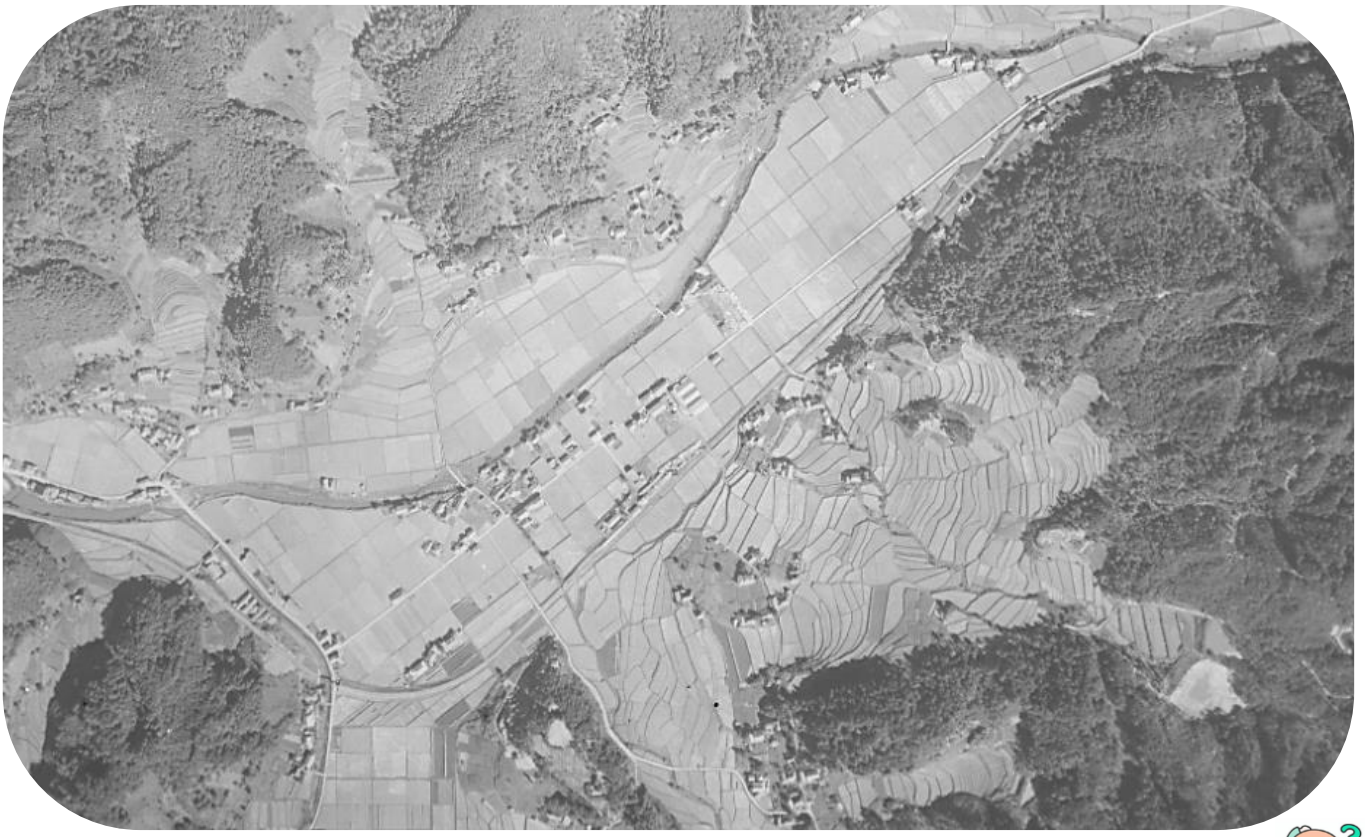
・ホットペッパーグルメ　・岩手県立博物館だより

28号の「ここはどこでしょう？」はわかりましたか？答えは高山でした。

今回の航空写真も、昭和50年に撮影された甲奴町のある地区の写真です。

どこだかわかりますか・・・

＊答えは最後に掲載します。



こちらは、昭和22年頃の写真です。現在と違って、田んぼが広がっていますね。

甲奴の伝説と民話【宇賀編】

◆鬼が橋・立石にまつわる伝説

昔、昔の大昔、鬼が住んでいた頃の話とさ。

中でも一番強力だと自慢していた大きな赤鬼。どっしどっしと金棒をつきながら、山を越え野を超えして、深山の奥までやって来た。

そこから滝山に渡ろうとしたが、そこには深い川がある。川幅は一〇mもあったかな。あたりは岩の絶壁でどうすることもできない。さすがの赤鬼も大往生。

そこで思いついたのが、石橋をかけることだ。そばにはそんな大岩がない。あちこち探しているうちに、東の方角の山の上に大きな岩があるのを見つけた。

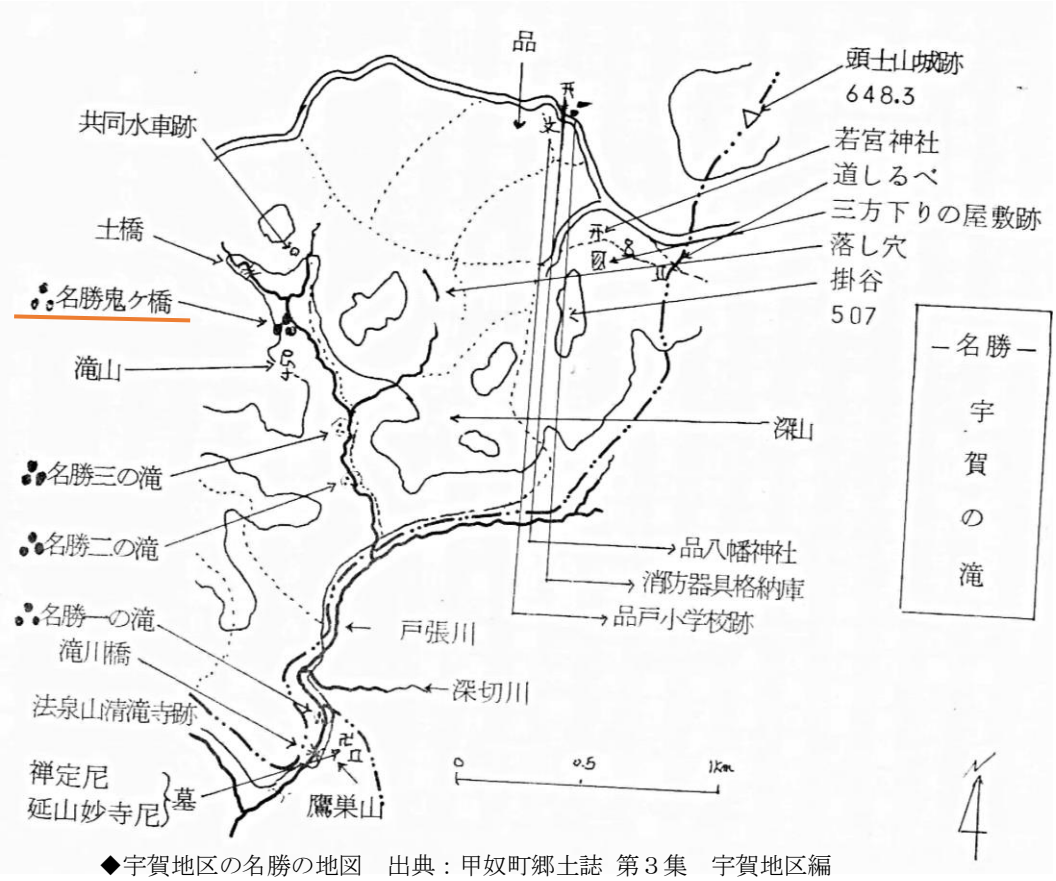
『よし、今晩のうちにこの岩で橋をかけてやろう。』

こう思いついた赤鬼は、よいしょ、よいしょと岩を起こし始めた。やっとのことで岩を起こした時には、東の空が明るくなりかけていた。

今からこれを運ばねばならぬ。担いでみようとしたが、それはそれは重くてどうすることもできない。石を立てたままで、とうとう夜が明けてしまったとさ。鬼もあきらめてしまったとさ。

これに因んで、橋をかけようとしたところを【鬼が橋】、石を立てたところを【立石】と、それぞれの地名になったそうな。

◆出典:甲奴町郷土誌　第三集　宇賀地区編より



◆宇賀地区の名勝の地図　出典：甲奴町郷土誌 第３集　宇賀地区編

≪鬼が橋≫　＊三の滝より四〇〇ｍ上流地点

掛谷から山の間の農道を北へ五〇〇ｍ進んだところに、堀切へ分かれる三叉路がある。ここから徒歩で堀切を下ること約一㎞、滝川の上流土橋川を右手に見下しながら進むと、途中にはかつて精米をしたといわれる共同水車跡がある。

現場に着くとあたり一帯は原生林を思わせるような感じである。雑木の茂った中に、安山岩の巨岩がそそり立っている。川底の幅は二～三ｍ。中ほどの岩の出っ張っているところの幅は約一〇ｍ。上の幅は約二〇ｍ、高さは約一〇ｍである。

昔はこのあたりまで水田の耕作に来ていたようで、対岸にも水田跡が草生地になっている。またここから三〇ｍあまり下にも昔の水田がある。

この川と戸張川（世羅町分）と合流して、一の滝の瀑布となっているのである。滝の下流の堤防の五〇ｍ下流には、いわゆる滝の清滝寺跡がある。　《昭和五三（一九七八）年六月一七日調査》

≪立石≫　＊山田の池から登って、右折、道の南側

山田の池から北へ三〇〇ｍあまり進んだところで、頂上付近に分岐点がある。ここを右折して東へ一〇〇ｍあまり進むと窪地がある。右手に一〇ｍくらいのところにある。

三つの巨岩が垂直に重なっていて、その高さは四五〇㎝、幅三二〇㎝である。安山岩で一番上の石の上部には、幅一～二㎝の亀裂がすらりと列をなしている。特に、目の細かい亀裂は珍しいものである。　《昭和五三（一九七八）年六月一七日調査》

甲奴の伝説と民話【上川編】

◆宇根堂の茶店屋　＊数尾

宇根堂（畦堂）は昔、三原から出雲路への重要な往還であった。当時は森林の中へ道がついている程度で、わずかに堂の東方に内附地区の農家が五～六戸見えるくらいであった。街道側に一軒小さな草葺屋根で、駄菓子や季節の柿などを売っていた人もあったそうである。

明治の初め頃になって、街道の片側の森林は、炭材として切り出された。今の奥田の家に住んでいた人が、明治一六年頃茶店を開店した。その建物は現在の納屋であり、その店は信国店である。駄菓子、一杯酒、灯油（当時はセキタンと呼んでいた）の量り売りを始めた。近郷の人が買いに来るし、往来の人々も立ち寄って飲食し、ますます繁盛した。その頃から街道に沿って民家が建築されて、多い時には九軒になった。（内附地区の戸数は一九戸になった。）

また明治三七年の頃から、藤井店が新しく開店した。（藤井サト。藤井好吉の姉である。）店の品物は、信国店と同じであったが、明治四五年から煙草小売りの許可をとり、郵便ポストも設置されて、切手、はがきも販売するようになった。

続いて大正六年頃から、宿泊業も兼業して、府中専売局員、上下警察署員の指定宿合格となった。

また、生鮮魚の料理を出す店が近郊にないので、村役場の宴会場となった。また理髪店を営む者もあって、宇根堂の全盛期を迎えた時代でもあった。

ところが、県道筋に荷馬車業者も増し、自転車の流行につれて通行者もだんだん減少し、店主も学校付近に転宅したり、また老齢化して店を閉じたりするようになり、戸数も順次減少し、わずかに六戸となった。

およそ人類の盛衰は「地の利」如何にある・・・とつくづく思わされるが、是非なき因果である。

◆出典:上川郷土誌資料集より

◆上川・宇根堂を示す地図

出典：上川郷土誌資料集より

甲奴の石造物紀行　＝サイの神＝

「サイの神」という神様の名前は最近ではほとんど聞かれなくなりましたが、道祖神とも呼ばれ、その名が示すとおり、道路交通や旅の安全を守ってくれる神さんで、日本神話の中でもニニギノミコトが豊蘆原（とよあしはら）の瑞穂の国へ降臨した時、猿田彦命が天の八岐（あめのやちまた）に出迎えて道案内をしたと伝えられています。

道祖神はもとは中国の旅の安全守護の神様でしたがこれが日本へ伝わり、平安時代からこの風習が日本に広がり、猿田彦命の神話とも習合して猿田彦となり、さらに鼻の高い天狗とも結びついて、サイの神に天狗の像が使われるようになりました。

◆左：猿田彦命　　右：ニニギノミコト

梶田八幡神社前の道路を少し西野進んだ峠の頂上付近の右側に、天狗を彫刻したサイの神の石像があります。

このサイの神の石像は高さ四一㎝で、中央に天狗（猿田彦命）の像が彫ってあり、天保七（一八三六）年申（さる）三月の文字が読みとれます。

サイの神はまた塞の神（さえのかみ）ともいわれ、村や集落の境界付近で、病魔・悪霊・盗賊・無法者などの侵入を防ぐと考えられていました。【甲奴町郷土誌甲奴地区編】によると、この塞の神が梶田友森の火のかけと、戸下のきじなが峠にあると記されています。

また、サイの神はその発音が幸い（さいわい）に通じるところから『幸神（さいのかみ）』とも呼ばれるようになり、子どもや家族の幸福を守る神様ともいわれました。福塩線梶田トンネルの上にある『幸之神社』、梶田戸下峠にある『幸之神』がこれにあたります。このように町内のサイの神は梶田地区に集中していますが、他の地区にもあるのかも知れません。

サイの神に対する民俗信仰は江戸時代中期ごろから急速に全国に広がり、他の民俗行事などとも結びついて、いろいろな「おかげ」を祈る民俗信仰に発展しました。

鳥取県の伯耆地方（ほうきちほう）で、サイの神について一一〇六人を対象に調査したところ、サイの神を縁結びの神・夫婦和合の神と答えたものが三八％、続いて子どもを守ってくれる神とするものが三六％、足を守り、旅の安全を守ってくれるとしたものが一七％という結果を得たという報告があります。

（「伯耆のサイの神さん」淀江町文化事業団）

サイの神をあらわす形としては、石に「道祖神」・「幸神」・「妻神」・「塞神」などの文字を彫刻したものもありますが、多くの場合石に神像を彫ってあり、その場合男一人の神像を彫ったものを単体像、男女二人の像のものを双体像と呼びます。中には男女の性器の象徴を祀ったものもあります。

下の写真は長野県・群馬県にあるサイの神・道祖神です。住宅地周辺、田畑の周り、道の傍ら・・・あちこちでこのようなサイの神・道祖神を見ることができます。男女二人の石像は仲睦まじい姿ですね。

小童春日井地区の南西部分で世羅町赤根地区に境を接する付近一帯が「サイの原」と呼ばれており、赤根の小童との境界近くの道のそばには、サイの神と思われる小祠が祀られています。

このように当地方でも、数は多いとはいえませんがサイの神が残っており、先人たちの民俗信仰の一端を知ることができます。

◆上下の写真

戸下峠にある幸之神社

◆いろいろなサイの神・道祖神

日本全国で『塞の神祭り』として行われいてる左義長（さぎちょう）火祭り。いわゆる『とんど』のこと。サイの神は防災・防疫・旅行安全・縁結び・安産などのご利益があるとされるが、それが『とんど』と結びついていることは、調べてみるまで知りませんでした。

『とんど』は、無病息災・五穀豊穣・一年の繁栄を願う祭りで有名です。よくよく考えてみると、サイの神のご利益と同じなんですね。

サイの神は『古事記』・『日本書紀』にそのルーツが見られます。境界にあり、災いを塞ぎ止める神で、本来は火とは関係のない神様でした。なぜ塞の神祭りが火祭りとなったかについては、左義長は本来、中世の貴族たちが毬を杖で打つ遊びに使った杖を、小正月の一五日に焼いていた宮廷行事でした。貴族の文化は近世に入ると武家や民間に広まっていきます。その過程で、勢いがあって、力強い印象を与える火祭りが、悪いものから村落を守るサイの神の祭りにふさわしいと人々は考えたのではないでしょうか。

鈴木牧之（すずきぼくし）が著した『北越雪譜（ほくえつせっぷ）』には、牧之の生きていた時代（明和～天保年間：一七六四～一八四三）に新潟県小千谷で行われていたサイの神祭りの様子が書かれています。雪で作られた壇の上に、杉の木を立て、それを中心にしてワラやカヤを結びつけていたようです。その頂上にしめ縄などで作った飛鳥（ひちょう）を取り付け、町の長が一年の繁栄を願い、拝礼した後に火をつけました。この火で焼いた餅を食べると、病気をしないと信じられていたようです。

また、サイの神祭りは他国でも広く行われましたが、百年ほど前から江戸では火災の恐れがあることから禁止されているとも書かれています。サイの神祭りは火祭りという性質上、たびたび幕府から禁止令を出されていたようです。

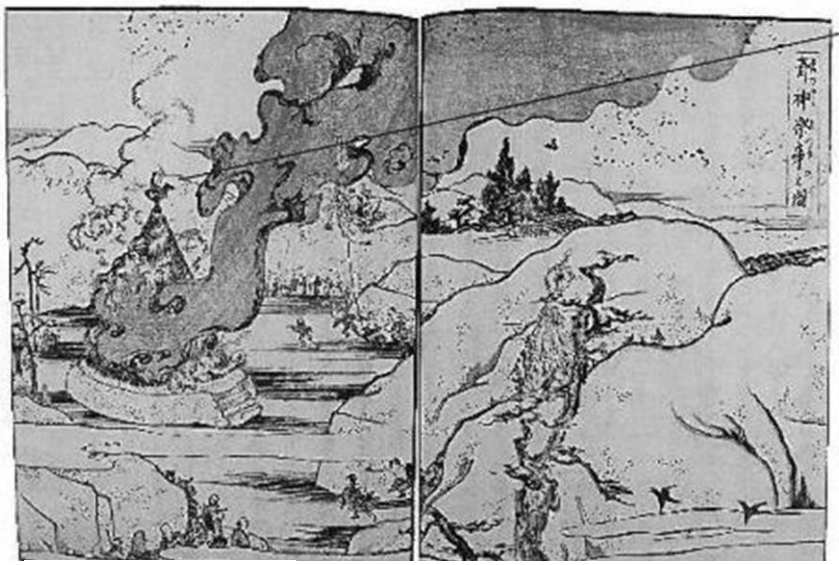
サイの神祭りは、近代に入ってからも抑圧されます。明治政府は近代化を推し進めるためサイの神祭りをはじめとする多くの慣習・年中行事を旧習として禁止の対象としていきました。

しかし、為政者の抑圧によって、サイの神や祭りが完全に消え去ることはありませんでした。

民衆が生んだ火祭りという形式の中で、サイの神は、日常生活の中で生まれるさまざまな願い事を祈る身近な存在として、今も受け継がれています。

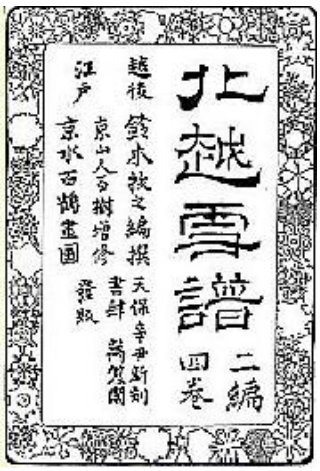
◆サイの神祭り、左義長（とんど）の様子

◆鳥取県大山町にある中山神社にある道祖神。ワラで出来た馬を飾っている。



飛鳥の形をしたしめ縄

◆左の図は、鈴木牧之が書いた『北越雪譜』の塞の神祭りの様子。



◆『北越雪譜』の表紙

これではないが、図書館で『北越雪譜』を貸し出ししている。

◆『北越雪譜』を書いた鈴木牧之の像

【参考資料】

・続々ふるさとこぼれ話　文化財調査報告　・新潟県立図書館

・美しい神社☆再訪したくなる神社　・片品村役場ＨＰ

・塩田まちづくり協議会

江戸時代の流行り病 ＝コロリ＝

新型コロナウィルスが流行り始めて四年目になります。三次市では、新年になっても百人を超える日が続きました。亡くなる方も多くなり、身近な人が感染したりと、もう遠くの出来事ではなくなってきました。

このようなウィルスなどで多くの罹患者や亡くなる人の多い出来事は、昔から起こっています。その例でよく挙げられるのは、江戸時代の【コレラ感染】ではないかと思います。

では江戸時代の人々はその時、どうしていたのでしょうか。

二五〇年以上続いた江戸時代は大変安定した時代で、文明的にも進んでいました。江戸文化は大衆文化で、歌舞伎や浄瑠璃など庶民が楽しむ娯楽が生まれました。浮世絵なども非常にレベルが高く、一般の人々が文学や芸術を楽しんだという江戸時代は大変すぐれた時代と言えるのではないでしょうか。

また、寿司やてんぷらなども江戸時代にできたものです。

そんな中でも、幾度となく病気が流行し、特に江戸末期になるとさまざまな感染症が拡がっていきました。特に人々を恐怖に陥れたのがコレラです。【安政のコレラ大流行】として、日本史などで習った方も多いのではないでしょうか。

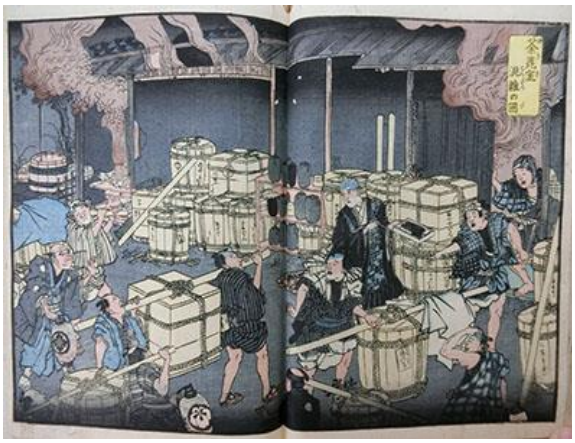
江戸時代といえば鎖国を開始して長らく外交は制限されていました。安政五(一八五八)年、日米修好通商条約が調印され、二二五年続いた鎖国が終わりました。その一ヶ月前に長崎に入港した一隻の船がきっかけで、コレラのパンデミックが起きてしまったのです。

ペリーが日本に連れてきたアメリカ船・ミシシッピ号の船員がコレラに感染していました。船員が長崎の出島に上陸すると、瞬く間に長崎に広がり、一ヶ月もたたないうちに江戸に広がり、そして二ヶ月後には東北まで広がりました。

コレラは、不衛生な環境にいるコレラ菌が口から入って感染します。当時はおもに生水からでしたが、口から入ったコレラ菌は、小腸の粘膜に定着し、非常にひどい脱水を起こします。この流行は、これより前文政五(一八二二)年に西日本を中心にコレラが流行りましたが、安政五年に規模はこれをはるかにしのぐもので、江戸だけで約三万人の命が失われました。正確な統計はありませんが、人口百万都市の江戸から約三万人の死者が出たということは、三～四％がコレラで亡くなったということになります。

死者が続出したことで、江戸の火葬場には棺おけが山のように積まれたようです。一家全滅した家も多くありました。

＊下の絵：火葬が間に合わない棺おけが並んでいる様子



コレラの症状は、嘔吐・腹痛、そして非常に激しい水のような下痢が起きていま

す。二～三日もたたずに「コロリコロリ」と亡くなることから「三日ころり」あるいは「コロリ」と呼ばれていました。

当時は有効な薬がありませんでしたので、生ものや生水をとらないといった予防に努めるしかありませんでした。衛生を重んじるという西洋の思想が入って来たことで、状況は徐々に改善されてきました。

備後国でも安政五（一八五八）年九月に流行し、死者が多く出たとの記録があります。いったん流行するとなすすべもなく、ひたすら神仏にすがり「蘇民将来の子孫」の札をもらって戸口に貼ったり、祈祷を受けたりしました。また、神輿を担ぐ、豆をまく、唐辛子をつるす、水・酢・白砂糖を混ぜて毎朝飲む・・・などの対策を講じました。

◆上の絵：縁起の良いものを拝むしかなかった

◆左の写真：疫病に効くという福山市多治米町にある木野山神社

明治になると通行が自由になり、物資の流通が盛んになったことで、周期的に流行しました。明治政府は感染拡大防止のため、徹底した消毒や患者の移動禁止、下水溝の掃除などを民衆に命じています。

一方で古くから疫病に霊験があるとされている備中高梁の木野山神社信仰が西日本を中心に盛況を極め、備後国でも各地で分霊の勧請が相次ぎました。

福山市多治米町では、明治一二（一八七九）年から明治一四（一八八一）年にかけ勧請したと伝わる木野山神社が三ヶ所に祀られ、今もそれぞれの地域で例祭が行われています。

甲奴では、本郷・西野・梶田の三村合同で行った『疫病退散祈御祷受書控』があり、同じように流行したと思われます。

昔人々は外出を控えるなど感染の流行が治まるまで、耐え忍んできました。しかし今日、コレラに対する薬の加発などにより、日本ではほとんど患者はなく、それほど恐ろしい病気ではなくなりました。コロナウィルスも早くそうなれば良いですね。

【参考資料】
・福山市　・徳島新聞
・ＮＨＫ
・国立公文書館
・横須賀市自然・人文博物館
・東京都立図書館

◆明治時代のコレラ疫防の図

季節のことば ≪ 雨水 ≫

『一月往ぬる（いぬる） 二月逃げる 三月去る』と言いますが、本当に一年があっという間に過ぎていくように感じませんか。たったこの間お正月だと言っていたのに、すでに二月になろうとしています。

日本には季節を表す言葉がたくさんありますが、生活に密着しているのは『二十四節季』だと思います。一月の小寒から始まり、一二月の冬至まで、その季節のことばから、昔の人々は農作業などの仕事の目安にしてきました。

二月は立春と雨水があります。立春は暦のうえでは今日から春ですよということ。

雨水とは、暖かい陽気になって、空から降るものが雪から雨に変わり、雪や氷が溶けて水になる・・・という意味があるそうです。

草木が芽生え、本格的に春がやってくるころといわれており、農作業の準備を始める目安にされていました。また、地域によっては、雨水の日にひな人形を飾ると良縁に恵まれるとも言われています。今年は二月一九日ごろだそうです。

寒い冬を超え、春へと季節が変わる。田んぼに水を貼り始めたり、少しずつ鳥や虫たちが姿を見せ始めるころ。早く暖かい春がやってくるといいですね。

ここはどこでしょう?の答えです。
昭和50年の場所は【抜湯】。昭和22年の場所は【本郷】。

事務局より

・会員募集中です。ご紹介ください。
・会の運営や研修内容について、ご意見やご質問何でも結構ですのでお聞かせください。
・昔の話や地区の行事など、ご寄稿・お聞かせください。
・古い写真や資料等がありましたら、お知らせください。「甲奴郷土史だより」へ登載していきます。
・出品物につきましては、責任を持って返却しますので、ご連絡をお願いいたします。

連絡先 鶴本 節子（カーターセンター）
☎〇八四七-六七-三五三五